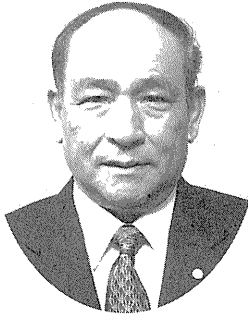


# ずいそう



## 建設業のルーツ

久保 文 夫

株式会社二神組の祖先は、江戸時代に伊勢桑名城主の松平氏が伊予松山への転封に際し随行した百姓だと言われて居ります。代々、藩命により河川改修、開田、灌漑排水等の指導に当たった様で有りますが、飢饉や不況等に際し救民事業に携わったという記録もあります。

伊勢桑名から知多半島付近は、木曾川、長良川、揖斐川の伊勢湾への河口にあたり毎年激しい水害にみまわれた為、桑名藩では国土防衛のために領民を総動員し多くの「組」という組織を作って水防にあたりました。やがて「組」は専門化し土木技術集団を形成し、それが現代の建設業の名称の何々組などの語源だと言われて居ります。

徳川幕府の親藩が全国に展開するに従って「組」は工事の企画や指揮に当たったり、近隣の農民を率いて全国各地に赴き、その技術の優秀さが全国に知られてまいりました。我が社の先人達は、この様な「組」に関係があると言われ、その関係か、松山城関係の営繕にも多くの工事実績を残して居ります。

松山城は、昭和20年の松山空襲で多くの建物が焼失致しました。幸いにも天守閣他、過半数の建物は焼失を免れて居りましたが、昭和25年より残存の建物について修復を条件に重要文化財に指定され、松山市では文化庁、文化財保護協会の監修のもと国庫補助により昭和26年度より改修事業に着手し、同時に焼失建物については写真や戦前の資料に基づいて新築復興が行われました。わが株式会社二神組は、戦前からの工事実績を買われ下記の工事を担当致しました。

- (1) 解体修理した建物（重要文化財）：天守閣及び基壇石組み/隠門及び続櫓、石垣/紫竹門及び東堀、西堀/野原櫓/一の門及び南隅櫓、続堀/二の門、続櫓/三の門、続櫓/仕切門/乾櫓
- (2) 古文書、写真等に基づき新築復興した建物：筒井門及び東西続櫓、石垣/太鼓門及び太鼓櫓、石垣/筋鉄門/乾門及び続櫓/丑寅門及び続櫓/天神櫓/巽櫓/内門/二の丸石垣/東堀石垣/南堀石垣/西堀石垣

### 石垣改修工事

筒井門、東西続櫓の新築復興に先だって、その基壇になる石垣の改修は、法長約15m、面積は1,000m<sup>2</sup>の大掛かりな解体復旧でしたが、その工事で築城当時の様子は以下の様に考察

されました。

- ① 築城は、藩の軍政そのものと、領民の全ての賦役と動員による正に国を挙げての人海戦術で有った。
- ② 築城当時、石手川は、花崗岩地帯を流下する暴れ川で城山の南側の現松山市街地で氾濫原をなして居り、石垣に使用された石材や栗石は、川原の転石や河床に有る花崗岩の露頭を石切場として加工のうえ櫓に組み斜路をコロ引きで運搬された。普請奉行足立重信による石手川流路の付け替えは、この時の石材採取にヒントを得たと云われて居る。
- ③ 石組の技法では、積み石の合刃をげんのうと石鑿で丹念に合わせ、粘土による型取りが行われた。この技法は、胴飼い部分にも確実に行われていた。
- ④ 裏込めは、川原で採集した栗石を整然としかも十分に積み上げ、土圧を完全に減殺す工夫がなされて居る。

筒井門復旧工事の後、太鼓門、二の丸、三の丸堀などの石垣工事では、上記工事の技法、経験が継承されて居ります。

#### 重要文化財松山城天守閣の解体修理

松山城は、天守閣、小天主、各隅櫓を回廊でつなぐ連立式平山城と呼ばれる優雅な形式で有りました。空襲などで小天主、隅櫓などが焼失しましたが、幸い天守閣他多くの建物が焼失を免れました。

天守閣の解体修理は、我が社にご下命頂き昭和43年から4年間をかけて施工致しました。工事は、天主全体に須屋根を施し、大屋根、小屋組、外壁を全て解体し、部材の全てを点検し、劣化部分の補正、交換を行いました。屋根瓦は、破損したもの(約40,000枚)を補充、屋根下地、壁下地は出来る限り当時のものを使用致しました。

この工事では高度な規矩術、巧妙な木組、手斧や槍鉋、など多くの工法や技法を習得致しましたが、その後の多くの建物の解体修理、新築復興に活かされております。

以上、会社のルーツについて述べて参りましたが、松山城改修工事以外は言い伝えなどに依るものであります。

建設業としての正式な記録は、大正2年4月20日付で愛媛県知事より二神久次郎に交付された「土木請負人証」でありまして、その4月20日を創業記念日と定めて居り今年が創業九十周年に当たります。この様な長い歴史の中で多くの工事実績と同時に豊富な経験を持った技術陣を育てて参りました。

現在わが国には、自然環境、エネルギー、高齢化社会など解決すべき問題が山積してあります。私達は、建設業を通じて提案し、それらの問題に就いて参りたいと考えて居ります。

—くほ ふみお 株式会社二神組代表取締役—